
禁煙日記

松嶋ネコヂロウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

禁煙日記

【Nコード】

N01970

【作者名】

松嶋ネコヂロウ

【あらすじ】

孝明（26歳）と妹、月子（17歳）の禁煙奮闘記録。禁煙中のあなたへ。

禁煙0日目

9月1日 晴れ

——臭いんだよ！

とあるファミレスでの一角。彼女の一声が響いた。

俺がこの日記を書き始めたのも、この一言が端を発している。これから俺が禁煙を決意するまでに至った経緯を、順を追って書いていこうと思う。

彼女のヒステリックな叫びに、周りの客が驚いて俺たちのテーブルに視線を集めていた。

俺は間抜け面で、目の前で般若の形相を呈する女を観察した。枝毛の無い黒髪を胸元まで伸ばし、毛先は軽くウェーブしていて上品な印象を与える。優しい人柄を印象づけていたはずのたれ目は現在、かっと見開かれ俺を睨み据えていた。小振りな唇は歪み、明確な敵意を剥き出している。

一体何が起こったのか。落ち着くため、俺は胸ポケットからマルボロを一本取り出し、口に咥えた。

「吸うなつってんの！」

口に挟んだマルボロの感触が無くなった。彼女は息を荒げ、俺の口から取り上げたマルボロを真横に放った。ピチャツ、と音がした。見ると、隣の席で居眠りをこいている老人の前菜スープにマルボロが不時着していた。老人が居眠りしていたことは不幸中の幸いだった。

はつきり言って、俺には何故彼女がそんなにも興奮して怒り出すのか理解できなかった。

「なあ、どうしたんだよアサミ」

俺は彼女の名前を呼んだ。俺は、今にも俺を噛み殺さんとするア

サミの態度が予想外だった。というか、彼女のこんな顔は今まで一度も見ることがなかった。

まずアサミのことを書いておこうと思う。

アサミとの出会いは、半年前のコンパだった。同僚の誘いで、大した期待も持たずにそれについていった俺は、なんとそこで彼女と運命的な出会いを果たしたのである。

知性のかけらも感じさせない下品な顔つきの女性陣が軒を連ねる中、アサミだけは異彩を放っていた。我先にと男を漁る肉食系丸だしの女共もそっちのけで、肅々と一人、テーブルの隅でジンジャーエールを啜っていたのだ。

俺は一目で心を奪われてしまった。

コンパ恒例の席移動の際、俺は迷わず彼女の隣に座った。猪突の勢いで接近を計る俺を、彼女はおずおずとした上目遣いで見上げてきた。彼女の瞳の奥に映る小さな怯えに、俺の心はまたもや揺れ動かされた。

なんてか弱い表情をするんだ！ これじゃあ、まるで群れからはぐれた子羊じゃないか！

アサミは、俺の父性と恋心をダブルパンチで攻撃してきたのだ。それからというものの、俺はどうしても彼女を自分のものにしたいと奮闘した。見た目と比例して性格や貞操感まで純潔を貫いていたため、アサミを口説き落とすにはかなりの苦心を強いられた。

しかし俺は諦めなかった。コンパから一ヶ月間、あれやこれやとアタックし、ようやく俺は彼女と付き合うことができたのである。

「なあ、お前さ」

アサミは普段の柔和な顔つきからは予想もつかないほど、眉根を上げてドスを利かせていた。俺の知ってるアサミはこんなヤンキー顔負けの口調ではない。「あもう、タカくん」か、悪くて「ねえねえタカくん」くらいのものだ。

「お前さ、もしかして煙草カッコイイとか思ってたんじゃないの？」

「はい？」

煙草カッコイイ？ 俺が？ そんなことはないと思うが。

ただ、「タカくん煙草臭いよお」と持ち前の純真さで嫌がるアサミに、「仕方ねえだろ、煙草の味はもう俺の身体に染み着いちまったのさ」と、シブい俺を演出していたくらいだ。

「大方、煙を嫌がる私に自分のワルさ加減でも見せつけたいんだろ？ 煙草を愛する俺カッコイイみたいな？」

まあ、アサミの言ってることはそこそこ当たっているのかもしれないが、でもそれが何だと言うのだろうか。彼女は、俺のこの煙草を愛する心意気を否定しようと言うのか。なんと厚かましい。

「猫被んのやめた。もう正直に言うわ、お前さあ」

彼女は中腰になり、俺の額に人差し指を当てた。

「ダ、サ、い、ん、だ、よっ！」

こっん、こっんと、台詞に合わせてリズムよく俺の額を叩くアサミ。俺は呆然としながら、ひりひりと痛む額をさすった。

「煙草吸ってんのがカッコイイって、お前高校生か？ つか、今時高校生でもそんな恥ずかしいこと言わねえよ」

この女は一体何なんだ？ 羊の皮を剥いたら狼だった、なんてありがちな表現だが、これでは羊の皮を被ったTレックスだ。

「しつこく口説いてくるから仕方なく付き合ってるけどな、これ以上私と付き合い続けたいなら、禁煙しろ」

アサミは垂れ目をこれでもかと吊り上げて俺を睨んだ。俺はその眼力にちよつと怖じ気ながらも、彼女の提案について腕組みをして考えてみた。やがて、俺は曖昧な笑いを浮かべ、「いや、無理無理」と手をひらひら振った。それからまたマルボロを口にくわえ、ドンキで買った一万のジッポで火をつけた。

ふー、と一息。食後の一服はたまらない。何物にも代え難い至福の瞬間である。

俺は煙草を持った手をあげ、また薄く微笑んだ。

「いや、ほらさ。俺にとって煙草って恋人みたいなもんでさ。ぶっちゃければアサミと同じか、それ以上に俺にはなくてはならないも

んなのよ」

アサミの顔が赤くなり、頬がピクピクと震えていたが、俺はさして気にはしない。俺の気分はもう、女を省みないほど狂った重度の愛煙家だった。多分、それがカッコイイと思ってたんだろう。

「禁煙なんてもう、とんと考えられ――」

「キモいんだよ！」

アサミの罵倒が店内に木霊し、続けざまに俺は顔面に水を浴び、ガラスの弾ける音が鳴り響いた。一秒もたたずに額に鈍痛を感じた。コップごと投げつけられたらしい。コップの破片が俺の膝や足下に散乱した。

顔を上げると、アサミは何故か泣きそうな顔をしていた。

「もう別れる！」加えて、涙声だった。

「え、いや、でもそんな煙草くらいで」

狼狽する俺を無視し、彼女は鞆を肩にかけ、慌ただしく店の入り口へ歩き出した。啞然とその背中を眺めていると、アサミは店のドアの前で回れ右をし、それから店中に響く金切り声で「死ね！このクソ喫煙者！」と叫んだ。

ファミレスの外に出るともう陽は大分落ちていて、そびえ立つビル群や車やコンクリートはオレンジ一色に染まっていた。

額に手を当てると、かすかに血が滲んでいた。

俺はマルボロを咥え、火をつけて歩き出した。

「フラれちゃったか」

夕日を背に、静かに失恋を嘆く俺。だが表には出さない。あくまで冷淡に、心の奥底だけで深く涙する。それがハードボイルドの掟だからだ。

しかし女というのは分からない生き物だ。不満をひた隠し、ある限度を超えて爆発する。表に出すのは、いい子ちゃんぶった偽りの自分だ。いや、これを女全てに当てはならないな。アサミは所詮あいう奴だった、と諦めるしかない。

よし、悲観はもう止めよう。帰って愛する妹のために夕飯を作らなくては。今日は何がいいだろう。ハンバーグ、エビフライ、ミネストローネにカルボナーラ。よし、ここは兄ちゃんの失恋祝いだ、豪勢に全部作っちゃうか。

ははは、何だろう、やけに煙が目染みるな。

未練を捨てながらも、失恋の痛みだけは忘れない俺カッコイイ……。

「――って馬鹿かよ！」

コンクリートに煙草を叩きつける。近くを歩いていた婆さんが驚いたように目を剥いて俺を見た。

「カッコつけてる場合じゃないだろ！ いやいや待て、そもそもこのカッコつけ方は何だよ、調子こいたエセ不良高校生かよ！？ 俺もう今年で26だよ？ もう高校は8年も前に卒業してんだよ！」

俺は叩きつけた煙草を拾い上げ、未だ灰を作り続ける火種を睨みつけた。

「お前か、お前のせいなのか！？」

そうだ、思えば前々から、アサミはそれとなく俺に禁煙を促していたんだ。ふとしたとき、煙草の害についての話題出してきたり、「面白そうだから電子タバコ買ったんだけど、使ってみる？」とか勧めてきたり、どう間違えたのか知らないが「漫画買おうと思ったら何故かこういう本買った」とか言って禁煙に関する本を五冊ほど渡してきたり。

なのに俺は何なんだ。何故かそれがカッコイイと思ってわざとアサミの前で煙草をふかすし、亭主関白気取って嫌煙家であるアサミを無理矢理ファミレスの喫煙コーナーに連れていくし、挙げ句の果てに自分の意志は曲げないとか訳の分からん思想掲げてアサミの言うことは一切の無視。俺の行動の一つ一つがアサミの心を傷つけていたのは明らかだ。

アサミが不満を溜め込んでいた？ アサミははっきり言わなくても、彼女なりの意思表示を何度もしていたはずだ。

「やっぱ俺のせいだよ」

俺は再び煙草を地面に叩きつけた。いつの間にか、怪訝な目で俺を見つめる遠巻きの存在を感じた。くそ、何見てんだ畜生。

そうか、よく考えればここは禁煙区域の場所だった。変な目で見られるのは当然というものだ。踏みつけるようにして何度も踵で煙草の火を消す。

俺は走りだした。早く帰って作戦を立てなければならない。

俺は今日から禁煙する。禁煙し、アサミを取り戻さなくてはならないのだ。

俺は自宅に帰り、本棚を探った。すぐにアサミがくれた5冊の禁煙本は見つかった。片っ端から文字を追ひ、効果がありそうな記述をメモに写していく。

実は今書いているこの日記も、「猿でもすぐにやめられる禁煙術」という本に書かれていた禁煙法の一つだ。禁煙日記をつけ、禁煙を始めた動機、禁煙するにあたって努力していること、普段の生活、その他諸々を記していく。こうすることで禁煙に対する意識向上を計れるというのだ。

次に、家中の至る所に「禁煙」の張り紙をするため、手書きで紙を作成していった。目につきそうな場所にこの張り紙をすることで、自身のモチベーションを高められるらしい。

この作業をしていると、部活帰りの妹が帰ってきた。

「兄ちゃん、煙草止めるの？」

俺の奇行を目撃し、妹は目を丸くして瞼をぱちぱちさせていた。

「止める。今すぐ止める。お前も手伝ってくれ月子^{つぎ}」

妹は手に提げた空手着を降ろす。自分の部屋からマジックペンを持ってくる、「張り紙、なんて書けばいい？」と尋ねてきた。俺はにやりと笑いながら「吸ったら正拳突き百発」とリクエストした。

妹と協力して張り紙を三十枚ほど作り、家中の至る所に貼って

いった。

俺が夕食を作る間、妹は黙々と禁煙の本を読んでいた。

夕食後、俺が「最後に一服だけいいか」と言うと、これまた妹は黙って頷いた。マルボロを一本取り出し、残りは箱ごとゴミ箱に突っ込む。

煙を吸い込むと、頭がぼうつとしていつもの快感が全身を巡った。旨い。旨過ぎる。が、この味は悪魔だ。俺はこれからこの悪魔と戦わなければならない。そう思うと、得体も知れない不安が襲ってきた。

こんなに旨いものを、もう二度と吸えなくなるのだ。仕事後の五分間のストレス解消も出来ない。酒の席の一服で気持ち良く酔うことも出来なくなる。寝起きのあの一服も、食後のあの一服も、夜に星空を眺めながらの一服もだ。

待てよ。

今からすぐに止める必要はあるのか？ どうせ禁煙するんだ、別に今日じゃなくなたっていいじゃないか。そうだよ、近いうちに禁煙するってことにして、最後の数日間で煙草の味を堪能してからでも遅くは――。

「うまい？」

妹がニヤニヤしながら俺を見つめた。挑発するような笑みだ。

お前は所詮その程度か、お前なんかいつまでたっても、どころか一生かかってでも止められないね。そんな風に言われている気がした。俺の中で、何か消沈しかけていたものが再燃した。

「くそまじい」

一口しか吸ってない煙草を灰皿に押しつける。ああ勿体ない、勿体ない。しかし諦めなければ。これ以上吸ったら余計踏ん切りがつかなくなる。これからもっと苦しい事態が待ち受けてるかもしれないんだ。これくらい乗り越えてみせろ！ 俺はそんな思いを込めながら、念入りに火種を潰し、灰皿ごとゴミ箱へ放った。

妹はそれを見て満足げに頷いた。流石だ、こいつと協力すれば何

とかやっていけるかもしれない。

今日は吸ってしまったから禁煙0日目。明日から一日目だ。

そういえば、額の傷は妹が手当てしてくれた。気を使っているのか、どうして怪我しているのかは聞いてこなかった。我が妹ながら、中々出来た奴である。

今日は勢いで書いたから出来事が飛び飛びだ。明日は自分の身辺状況をまとめよう。幸い、明日は仕事も休みだ。

風呂はさっき入ったし、今日はもう寝よう。

禁煙0日目（後書き）

日記と表現しておりますが、この物語はフィクションです。

禁煙1日目

9月2日 雲一つない晴天

禁煙というのは、恋愛に似ているなと思った。昨日アサミに言った台詞ではないが、煙草は俺にとっての恋人のようなものだ。寂しいとき、イライラしたとき、気持ちが落ち着かないとき、そんなときに俺を癒してくれるのが煙草なのである。

禁煙を始めて改めて感じたのは、煙草に対しての強い未練だった。もう二度とあれを味わうことがなくなるのかと思うと、何だかやり切れない気持ちになる。

ただ、今回俺は捨てる側じゃなく、捨てられる側だったのだ。アサミに捨てられたと言うことは、つまり煙草に捨てられたも同然だと言うことなのだ。

多分そうだ。というか、そう思わなければもう二度と禁煙のチャンスなんて訪れない気がする。

今日は休日。目が覚めたのは早朝の五時だった。

俺は起きた直後、半ば無意識的に煙草を探していた。カートン買いで溜めておいた煙草があったはず、おかしいな、と。そこでようやく俺は気づいた。

そっか、禁煙したんだっけ。買い溜めてあった煙草はもう昨日ゴミ箱の中に全部捨てた。諦めて、布団を頭から被ってミノ虫の真似をしてみる。ゴロゴロ、ゴロゴロ。

……馬鹿やったらちよつと落ち着いたかも。

昨日本を読んで俺は学んだ。吸いたい衝動が出てくるのはほんの数分らしくて、その数分さえ我慢できれば何とかなるという。一番辛い禁煙二日目、三日目はその数分間の周期間隔が短く、注意が必要だ。

ただ、「絶対吸わないぞ」だけじゃ成功しないものだ。色々対策を実践していかねば。

それから俺は朝食を作り始めた。ご飯を炊き、鮭の切り身を二枚焼きつつ、だし汁の中で味噌を溶いていく。朝食ができるころには妹が起きてきていたので、一緒に食べ始めた。

「兄ちゃん」

「ん？」

「吸ってないよね」

俺は頷き、当たり前だろ、と言った。

「そもそも昨日全部捨てたし、吸いたくても吸えないだろ」

本当のことを言うと、朝からずっと吸いたい衝動に駆られてソワソワしていた。寝起きの一服によって、喫煙者をヘビーかライトかに分けられるそうだと。

寝起き三十分以内に煙草を吸わないと落ち着かないのはヘビースモーカー、寝起きの三十分間くらいなら我慢できるというのはライトスモーカーだ。俺はさっきの落ち着きのなさからいっても、普段の喫煙本数からいっても、恐らくヘビースモーカーに分類されてしまふのだろう。朝に吸えないというのは、他の様々な状況と比べても上位に食い込むツラさだと思う。

それを察してか何なのか、妹が「ご飯食べたら、ちょっと公園いこうよ」と言ってきた。「運動すれば吸いたい衝動を抑えられるらしいよ」

「ああ、確か本にもそう書いてあったな。で、運動って何すんの？」
「空手」

妹は短くそう言った。そういえば最近運動してないな。なるほど、家でじっとして煙草の誘惑に悶々としているよりはいいかも。

ていうか空手って。もしや妹の組み手にでも付き合わされるのだろうか。でも俺、空手なんかやったことないぞ。

朝食を終えて食器を片づけると、俺と妹はジャージに着替えて家

を出た。

妹がいきなり走り出したので俺は慌ててそれについていった。突然のランニング開始から五分と経たずに息が切れる。別に歳のせいではない。明らかに煙草で肺がやられている。

「ちょ、月子、ペース落として」

「頑張れ兄ちゃん。男のくせに情けないぞ」

この場合男も女も関係ないと思った。俺は元喫煙者なのだ。

公園につく頃には、もう息切れどころかまともな呼吸すら出来ていなかった。ぜー、ぜー、と掠れた音が喉から漏れる。くそ、喫煙なんかにハマるんじゃないかった。

煙草で後悔する気持ちは、こうした運動能力の低下か、病気になって床に伏した瞬間くらいのものだ。次点で他人から煙たがられる（二重の意味で）ときだろうか。

やべ、ひとつ走りしたあとって煙草吸いたくなるな。

「兄ちゃんに問題です」

俺の呼吸が整うのを待たず、妹が言葉をかけてくる。俺は膝に両手をついたまま顔を上げた。驚くことに妹の方は全く息が上がっていない。これが健康体と不健康体の違いなのだろうか。

「空手の試合で負けたときに後悔することって、一体なんでしょう？」

「はあ」

これは何の質問だ。意図が分からない。

「知らねえよ、俺空手やったことないし」

妹は人差し指を立てる。

「一つ、周りの雰囲気にならされてしまうこと」

そして中指、薬指を順に立てていく。

「二つめ、相手に負けること以前に、自分に負けてしまうこと。三つめ、昔の失敗を繰り返して負けてしまうこと」

四本目の小指を立てる。

「四つめ、苦しい・嫌だ・楽になりたい、と諦めの虫が出てきてし

まうこと」

俺は頬に汗を伝わせながら、その四本の指を眺めた。妹の言いたいことは何となく分かる。空手の試合も、禁煙と似てると言いたいのだ。

「兄ちゃんにはこういう弱い気持ちに負けて欲しくない。だから兄ちゃんには空手の特別な呼吸法を伝授します」

妹はそう言うのと、公園の砂をざっと踏みしめ、正拳に握った両手を胸の上で交差した。口が開き、「こおー」と絞り出されるような吐息が吐かれ、ゆっくりと両手を降ろした。

「これは極心空手の“息吹”。これを試合の前にやるとね、息が整って気分が落ち着くんだよ」

妹は更に詳しく“息吹”について説明してくれた。

「息吹は、息を吸ってお腹を膨らませて、吐くときに更にまた膨らませるの。肛門はぐっと絞める感じ」

17の女の子が肛門とか言わないで欲しい。ともかく俺は妹の言う通りにやってみることにした。

ケツを絞め、下腹部を固めて思いつきり息を吐く……。

「はぁ、げほっ、げほ……」

「むせるのはちゃんと息を吐いてない証拠。吐くときも緩めちゃダメだよ」

再度チャレンジ。

「……はぁーっ」

ぴたり、と荒れていた呼吸が静まる。すげえ、本当に呼吸が楽になった。

妹はうんうんと頷くと、それから今度は空手の型を順に教えてきた。

このとき、朝の七時。同じ公園内には、健康体操や太極拳に勤しむおっさんやおばさんしかいない。俺たちの空手稽古も、それら日常の風景と同化していただろう。

昨日の夜から煙を一切吸っていない俺の身体は、朝の清々しい空

気をすうつと肺に取り入れることが出来た。空気にも味ってあるんだな、と俺は実感した。

家に戻ったのは11時を少し過ぎた頃だ。

禁煙には呼吸が大事だと分かった。深く息を吸い込み、吐けば、それなりに気持ちちが落ち着いてくる。家に帰ってから妹とリビングでゴロゴロしたりゲームをしたりしていたが、今日一日は例の呼吸法でなんとか乗り切ることが出来た。

この日記を書き始めたのは21時。夕食は既に済ませ、風呂もさつき入ったばかりだ。明日は仕事が早いので、この日記を書き終えたら寝ようと思う。

さて、最後に俺と俺の周りの状況をまとめておこう。

俺、千ヶ原孝明26歳。喫煙歴9年。銘柄はマルボロとクールを少々。過去、一日一箱半、ないし二箱を消費していた。

現在、禁煙一日目がほぼ終了。禁煙が成功したら、アサミにもう一度やり直してくれるようお願いするつもりだ。

妹の月子は全面的に俺をバックアップし応援してくれている。家族構成は二人なので他は特に無し。明日はお互い仕事と学校なので、仕事中は俺の意志だけでなんとかやり遂げるしかない。

職場は喫煙者が多いので極めて注意が必要だ。ここで、どうなることやら、と他人事のように受け取ってはいけない。絶対にこれだけは負けてはいけないのだ。

よし、これくらいだろうか。

じゃあ、今日はもう寝る。

禁煙2日目

9月3日 天気も気分も曇り

今日は壮絶な一日だった。禁煙のツラさをまざまざと感じた日だった。現在の状況もかなり苦しいが、最初から細かく書いていこう。禁煙二日目。

朝起きて感じたのは強い倦怠感だった。昨日は22時前には寝たので八時間以上は寝たことになる。眠くはない。眠くはないはずなのに瞼が重い。半開きの状態だ。肩に違和感があるが、肩凝りとは違う気がする。それとは違うだるさだ。口の中が唾液でべっとりとしていた。喉が乾く。気分もひどく落ち込んでいた。昨日妹に教わった呼吸法を試してみるが、全く効いてこない。

一番は肺だ。肺の奥がじくじくとざわめいているのがわかる。肺が刺激を欲しているのだ。

昨日感じたのは精神的なツラさだったが、今日のは肉体的なツラさだ。精神面より短絡的なものなので、余計に厄介かもしれない。

リビングへ降りると、ご飯のいい匂いが漂っていた。禁煙二日目、三日目は大変だからだろうと、妹が代わりに朝食を作ってくれていた。

口が寂しくて堪らないので、俺はがつがつとおかずを喰らった。ご飯も三杯おかわりした。妹から俺のあまりの食べっぷりに、「成長期の野球部みたい」と言われた。

朝食後、朝っぱらにも関わらずアイスを食べる。口内がすーすーして吸いたいイライラが幾分か収まる。

通勤電車の中で腹を下した。間違はなくアイスの影響だ。途中下車してトイレへ駆け込んだ。危うく今日は会社に遅刻しそうになった。

仕事中、ニコチン不足のためか、どうも仕事に身が入らなかった。頭が冴えず、PCのディスプレイに写った会議資料の内容が頭に入っていない。貧乏揺すりも止まらない。

見かねた三澤主任が俺の肩に手をかけ、「千ヶ原、ちょっとだけ」と煙草を吸うジェスチャーをした。仕方なく俺は席を立つ。

喫煙室でアサミから貰った電子タバコを取り出すと、三澤主任は小馬鹿にするように笑った。

「何だそのおもちゃ」主任は緩めた口元にピースをくわえる。「まさかそれで禁煙のつもりか？」

むっとした。俺がどんな気持ちで禁煙してるかも知らないで。

「主任も禁煙しましょうよ」

無駄な誘いは承知の上で言ってみる。主任は喫煙歴20年の生粋の喫煙家だ。予想通り主任は耳を貸さない。

「止めようと思えば止められるけどね俺は。そもそも依存してねえから、止める必要はないな」

よく言うと思った。主任は一日10本から15本ほどこしか吸わないと言うが、吸い続けている時点で依存してるだろう。

「でもお前が禁煙なんて信じられんな。親父さんがどうか昔言ってたよな。そのときも止めるつもりはないとか言ってたのに」

「親父のことはきっかけの一つに過ぎないですね。実は俺、この前煙草が原因でフラれたんすよ」

主任はそれを聞いてゲラゲラと笑いだした。

「フラれたのが原因って、お前もとことん女々しいな」

俺は何も言えなかった。主任は美味しそうに煙を吸い、はぁ、と吐き出した。俺は電子タバコをくわえ、口から無害な水蒸気を吐くと、なんとも寂しい気分になった。

ああ、肺に刺激が欲しい。

仕事が終わってさっさと帰る準備をしていると、三澤主任に呼び止められた。この後飲まないかという誘いだった。三澤主任の後ろ

には入社2年目の小林がニコニコと笑みを浮かべていた。小林も喫煙者だ。

三人で軽く串焼きでも食いにいかないか、と主任が言う。

俺は迷った。できれば酒は飲みたくない。酒を飲むと連鎖的に煙草が欲しくなることは分かっていた。俺が答えにつまっていると、

「恵比寿の串焼き屋がいんだとき、小林が。そこでいいか？」

と、主任は早くもどこへ行くかという計画を立て始めていた。俺、まだ何も言っていないのに。

引っ張られるように、俺は主任と小林に連れて行かれた。小林の提案したらしい店の看板には、『串焼き高校球児』とかいう訳の分からん名称で掲げられていた。ここの店長が大の高校野球好きらしく、店内には歴代の甲子園球児たちの写真が飾られていた。

店内は全面喫煙席。入った瞬間、煙草の誘発的な空気が鼻をついた。三人で席に座ると、真っ先に主任がピースに火を着けた。

「千ヶ原先輩もどうすか？」

と小林がライターを差し出す。俺がじっと小林を睨むと、主任がまたおかしように笑いだした。

「先輩をいじめんなよ小林い。千ヶ原、今禁煙中なんだとよ」

小林がきよんとした。「すみません」、とライターをしまう。

なんだよこの空気。俺がノリ悪いみたいな感じ。くそ、やる気が削がれる。こんな誘い、きっぱり断るときゃよかった。

主任に続き、小林も煙草に火をつける。キャスターのマイルドだ。主任はそれを一瞥して言う。

「小林、やっぱキャスターに戻したのか」

「そうなんですよ。マイセンは性に合わなかったらしくて、やっぱ俺にはキャスターが一番っす」

このやりとりを聞いて思い出す。そうだ、喫煙者にとっては煙草は立派なコミュニケーションツールなのだ。あの銘柄はどうか、メンソールはうまいだとかまずいだとか、最近は喫煙者の肩身も狭くなったなあとか。たかが煙草一つだが、喫煙者の間では結構話題

が広がるものなのである。

二人から仲間外れになった気がして、俺は急に疎外感を感じてしまった。

ほどなくしてビールが人数分運ばれてくる。三人で乾杯をして一口。うめえ。仕事の疲れも一気に吹き飛ぶ。

話題は部長の悪口で盛り上がり、俺も酒が回ってか結構いい気分になってきた。頬がほっこりして、口の中が緩む。だんだん口が寂しくなってきたので、豚串焼きを頬張って誤魔化す。

「せんばあい」

小林が絡んできた。こいつは下戸で、まだ少ししか飲んでないのにもう顔を真っ赤にしている。口に煙草を挟んだまま俺に寄りかかってくる。こいつは職場内で確かにホモだとかカマだとか囁かれている。ある意味危険な男だ。

「禁煙なんてえ、止めましょうよお」

「くせえ、くつつくな」

なんでですかあ、と煙を吐き出す小林。キャスターの匂いは甘ったるくて嫌いだ、今の俺にとってはその匂いすらも魅力的だった。煙が顔をかすめ、目が痛い。主任は「止めといてやれよ小林。千ヶ原が可哀想だろ」と言いつつ、どこか楽しそうだ。

ほらあ、と小林が俺の口元にキャスターを持ってくる。目を泳がせて数秒迷ったが、俺は小林に拳骨を喰らわした。小林は「いたあい」とカマっぽく言った。

ああ——辛い！

もうこの二人が、俺の禁煙を妨害するためにここへ誘ったとしか思えなくなってくる。禁煙するには、できるだけ応援してくれる人のそばにいないでは駄目だと思った。俺はこの誘いに乗った時点でかなり失敗している。この光景は恐らく後々まで尾を引き、俺を誘惑し続けるだろう。

帰りの電車内で俺は気づく。何の気なしに、背広のポケットに手

を突っ込むと、中からキャスターの箱が出てきたのだ。

箱を開けてみる。中にはキャスターが三本ほど収まっていた。

「小林いい……！」

小さく呻く。隣に座ったOLが変なものを見るような目に向けてくる。

明日絶対絞め殺してやるぞ、小林。俺は心に誓い、ポケットにキャスターの箱をしまった。これは駅前のコンビニで捨てよう。

家に帰る。時刻は22時10分ほど。妹はすでに帰っていて、夕食にラップがかけられていた。

「兄ちゃんお帰り。今日は遅かったね」

「うん、ちょっと飲んできた」

「そうなんだ、大丈夫だった？」

煙草のことだろう。俺は自信を持って頷いた。妹が良妻のごとく俺の背広を脱がそうとする。俺は慌てて「服くらい自分で脱ぐ」と言った。

別に捨て忘れていたわけではないが、俺の背広のポケットにはまだキャスターが入っていた。もちろん後で吸うわけではない。その、なんていうか、そう、匂いを嗅ぐだけだ。自分に言い聞かせた。

風呂に入って、また腹が減ってきたので妹の作ってくれた夕食を食べた。禁煙してから食べてばかりだ。どうも食欲が抑えられない。

その頃には、時刻は24時を過ぎようとしていた。妹はもう自分の部屋で床に就いている。俺は部屋に戻り、背広のポケットからキャスターを取り出した。一本取りだし、フィルターを鼻に押し当てる。串焼き店での光景が脳内をかけ巡った。キャスターの匂いは嫌いなはずなのに、なんでこんなにも恋しく思えるのだろうか。

俺は部屋中の引き出しという引き出しを開けて回った。ライターを探していたのだ。これは本当に無意識だったし、危なかった。無論、ライターも煙草と一緒に全部捨てていたので、見当たるはずもなかった。愕然として、俺はその場に立ち尽くした。諦めて、またキャスターの匂いを嗅ぎ出す。

泣きたくなってくる。これではまるきり麻薬中毒者だ。俺は今、
どれだけ情けない姿をしていたのだろう。

喉の奥から、何か悪いものが込み上げてくる。

手だ。これは悪魔の手だ。じわじわと悪魔の使いが足元から、肺
の奥から、じわじわ上へ上へと上ってくる。

もう嫌だ。何故こんな苦しい思いをしてまで禁煙しているのだろ
う。アサミなんてもう忘れて、煙草に理解のある女を探せばいいじ
ゃないか。あんな猫被りのどこがいいんだよ。

キャスターをくわえる。火はついていないが、がむしゃらにすー
はーすーと深呼吸をした。なんだ、この方が吸ってる気分を味わえ
るじゃないか。火さえつけなきゃいいんだ。煙は出ないし、身体に
も害はないはず。

ふと、俺の目にあるものが映った。

鏡だった。折りたたみ式の手鏡が、俺の机の上に立てかけられて
いた。俺の顔が写っている。キャスターをくわえた間抜け面である。
「うわあああつ」

俺はくわえていたキャスターを壁に叩きつけ、キャスターの箱を
何度も足で踏みつけた。それから悲鳴じみた声を上げて頭から布団
を被った。

妹が起きてきて、俺の部屋に入ってきた。床でぐしゃぐしゃにな
ったキャスターを見下ろした。

「捨ててくれえっ」

「に、兄ちゃん」

「さっさとそれ、捨ててくれっ」

妹は何も言わず、床を掃除してくれた。掃除が終わると、静かに
俺の元へと歩み寄ってきた。俺は慌てて、また布団を被った。妹が
布団の上に手を置く。端から見れば引きこもりを説得する母のよう
な図だっただろう。

「禁煙、もう止める？」

「止めねえ」

即答した俺だったが、実は心が揺れていた。一番の応援者が、そんなことを言ってきたのだ。

「そんなに辛そうなのに、あたし、これ以上兄ちゃんのこんな姿見たくないよ」

だがそれ以上に堪えたのが、こういう、俺を甘やかしたような妹の台詞だった。兄としての威厳が今、完全に崩壊している。情けなさ過ぎて、また泣けてきた。

「月子、頼むからお前だけは応援しててくれ。頼むから、お前だけは俺に甘い言葉をかけないでくれ。でないと、俺はまた駄目人間になっちまう」

俺は意地を張った。妹は間を置いて、「分かった」とだけ静かに言った。沈黙が苦しかったので、俺は布団からよきつと顔を出した。

「もう寝ていいぞ。悪かったな、起こして」

「ううん、いいよ」

妹は心配そうな顔をしていた。

妹が部屋を出ていってから、俺は机についてこの日記を書き始めた。禁断症状のせいか手がおぼつかない。どことなく字が震えている。今日の出来事はかなり効いたらしい。

俺はまだまだ禁煙というものを嘗めていたのかもしれない。もっともつと気を強く持たなければ、と痛感した。

明日は禁煙三日目。ニコチンが身体から完全に抜けるのは禁煙から三日目までだという。となると、明日が最大の山場だ。

今日はもう何をやっても駄目だ。寝る。

禁煙3日目

9月4日 小雨が降っている

朝、目覚めの辛さは昨日と何ら変わりはなかった。昨日酒を飲んだが、二日酔いという感じはしない。しかも妙に早い時間に起きてしまった。三十分ほどベッドの上でぼーっとしていたと思う。ひたすら壁に貼られた『吸ったら正拳突き百発』の文字を見つめていた。やがて喉がカラカラに渴いていたことに気づき、のそりと起きあがってキッチンへ向かう。冷蔵庫の扉には『絶対禁煙!』の紙。牛乳パックに『兄ちゃんファイト!』の文字。流石にこんなところまで書くのはやりすぎだったが、妹は本当にいい奴なんだなと感動してきた。

コップになみなみと牛乳を注いで一気飲み。

9つも歳が離れた妹というのは、本当の娘のように可愛いし、妹の方も俺によく懐いてくる。小さい頃はがさつでいい加減な父には全く懐かなかったため、その分俺とよく遊んでいた。昔は鼻水やら涎やらを垂らしてブランコに揺れていたものだが、今となってはどこに出しても恥ずかしくない女の子になったと思う。優しいし、可愛いし、運動神経も抜群で、家庭的な上に器量よしときている。勉強の方は少し難ありだが。ともかく俺のようにだらしなくて性根の腐った男が寄りつかないこと切に願う。

妹が中々起きてこないで朝食の準備を始める。

ねぎを切っていて気づく。切れ目がガタガタで間隔も長い。これでは薬味という役割が薄れてしまう。どうにも物事に集中できていない。頭がぼうつとして料理をする気も起きない。

朝食の準備を終えたのは6時半。いつもならとっくに起きてきているはずなのに、妹が中々部屋から出てこない。

部屋に行くと、妹はまだ寝息を立てて眠っていた。胸の上に乗せ

られ手に、禁煙の本が握られていた。

「月子、寝坊するぞ、おい」

揺すって起こすと、妹は跳ね上がるように目を覚ました。その拍子に手から本が滑り落ち、ベッドの下に落ちた。

「今何時？」

「ちょうど6時半だよ」

「なんでもっと早く起こしてくんなかったのっ」

妹が眉を下げて言う。

「何だよ、朝練でもあったのか？」

「違う、あたしがご飯作ろうと思ってたのに」

俺は床に落ちた本を拾い上げた。

「昨日はもう寝てくれて言ったのに、遅くまでこれ読んだのか」
「えっ、うーん」妹はとぼけるように視線を逸らす。

「応援してくれとは言ったけど、お前にまで無理はさせたくないからな」

俺は、全くこいつは、というようにため息を吐いた。

「飯ならもう俺が作ったから、着替えてさっさと出てこいよ」

妹の額をつんと突き、俺は部屋を出ていった。内心、ちょっと嬉しかった。

その後、制服に着替えた妹が慌てて部屋から出てくる。今日は日直だそうだ。トーストにジャムを塗って渡すと、犬のように噛みつきだした。少し行儀が悪いと思ったが、トーストをくわえたまま登校した場合、少女漫画的に考えて最終的に妹が何かしらの恋に落ちてしまいそうな気がするのでよしとしておいた。

会社に出勤すると、小林がもうデスクに座ってカロリーメイトを食べていた。そっと近づいて拳骨をかましておく。小林は頭にはてなマークを浮かべてこちらを見る。昨日の仕返しだ、と言うと、小林はさらに頭を捻りだした。昨日のことは覚えていないらしい。いい気なものだ。

俺はとにかくイライラしていた。特に何があったというわけではない。強いて言えば、ニコチン切れがピークに達していたということだ。頭の片隅にいつも煙草の影がちらつく。昼の会議では内容が頭に入ってこなず、そのせいで、三澤主任から意見を求められた際にうまく答えられず、いつもの辛辣ぶりで叱られてしまった。

会議が終わったあと、また主任に喫煙室へ誘われた。何故禁煙中の俺を誘うのか全く以て理解できない。そんなに俺に禁煙失敗させたいのだろうか。

「今日のお前、ほんとおかしいぞ」

主任は紫煙を吹き出し、そんなことを言った。俺は焦点の定まらない目でその煙の行方を追う。そうすかね、と気のない返事をした。「どうせ無理に気張って禁煙してんだろ。お前の場合、喫煙の害より、その禁煙のストレスの方が身体に悪いんじゃないのか？」

言われてみればそうかもしれない。この三日間、頭の中ではいつも煙草を吸う自分を思い浮かべている。その行為に焦がれているものの、その欲求を無理矢理抑えつけていたのだ。本当に辟易してくる。何のために禁煙を始めたのかすら忘れてしまいそうなくらいだ。

「いきなり止めるからいけないんだ。まずは本数を減らすことから始めたらどうだ？」

主任は胸ポケットからピースを取り出し、その一本を抜いて俺に差し出す。俺は無言でそれを受け取った。

本数を減らすことに意味はない。時間を置いた煙草というのはいつもとより美味しく感じられ、無意識に普段より多く煙を吸い込んでしまうのだ。害の程度に差異はほとんどないらしい。そもそも、ニコチンが身体から完全に抜けるには三日もかかってしまうのだから、これを吸ってしまえば昨日までの二日間は無駄になってしまう。

そう、この知識も、アサミからもらった本で得たものだ。

頭では分かっているんだよね、頭では。でもさ、やっぱね、本音を言うとは。

——吸いてえ。

唾液が口内を占領する。ここで吸ってしまえばどんなに楽だろう、そんな考えが頭を占めていた。

「どうした？　もしかしてライターないのか、貸すぞ」

主任の声が地鳴りのように低く響いて聞こえる。出た、悪魔だ。どうしてこうも毎度、俺の心が弱った隙について悪の囁きが聞こえてくるのか。

主任はライターをつけ、俺に向けて火をちらつかせている。どうしてそんなに俺に煙草を吸わせたいのだろう。そんなに俺の禁煙が気に食わないのだろうか。俺は主任を恨んだが、逆を言えばその誘いに乗ってしまいそうだったのも事実だ。ここで吸っても、妹やアサミには「まだ一本も吸ってないぜ」とでも言えばバレないんじゃないのか？　そんな考えまで頭をかすめる始末だった。あれは本当に、危険だった。

「あ、おつかれっすー」

そこで小林が喫煙室に入ってきたことは、奇跡に近かった。俺は小林が入ってきたことではっとしただった。小林は「あれえ」と黄色い声をあげて茶化すように言った。

「先輩、禁煙失敗っすかあ？」

ブチツときた。我に返った、と言ってもいい。

俺は何を考えていたのだろう。ここで吸えば、俺はまたアサミにフラれたあのとときの俺に戻ってしまう。ここで吸ってしまえば、俺はまた元のアホで自意識過剰な喫煙家に戻ってしまうだろう。それはつまり、俺を無償で応援してくれた妹をも裏切ることになる。

俺は小林の肩を小突き、「まだ吸ってねえよ」と突っぱねた。小林は、ですよ、と昔のトレンドドラマのように舌を出して小さく頭を下げる。

俺は主任へ向きなおり、ピースを手渡した。

「すみません主任、俺やっぱ吸えないです」

主任は無言でピースを受け取り、どこか気難しい顔をした。

俺は二人を残し、喫煙室を出た。いくら気を確かに持っても、口のほうはまだ幼児のようにくわえるものを欲しがっている。ちょうど休憩の時間だったので、自分のデスクで弁当を広げ、一心不乱に食らい出した。

禁煙をして実感したのが、食べ物の味だった。煙草で味覚や嗅覚が麻痺していたのか、禁煙後は味も風味も何割増しか濃く感じられた。禁煙前に妹から「兄ちゃんの料理しょっぱい」と何度もブーイングを食らっていたが、禁煙してからはそういう指摘はない。むしろ、「美味しくなったね」とまで言われたほどだ。

そして、無性に腹が減る。煙草によって幾分か抑えつけられていた食欲が復活しているようだ。最近お腹が出てきたので避けたいことだったが、もはや背に腹は変えられないだろう。ダイエットは禁煙が成功してからだ。

その後、仕事も難なく終え、定時で退社することができた。外に出ると小雨が降り始めていたので、近くのコンビニでビニール傘を買うことにする。レジの前に煙草が売られていてうっと来たが、唾を飲みこみ、フリスクを買って我慢した。

コンビニの前でフリスクを数粒口に放り込み、よく咀嚼して舌を刺激させる。深呼吸をすると、爽やかな感覚が肺を突き抜けた。

傘を開き、歩き出しながら、ふとあることを思い出す。俺は一度だけ、前にも禁煙を試みたことがあった。あれは、社会人になる前だったか。

新入社員として入社し、心機一転、綺麗な自分で仕事に励もうと、我ながらフレッシュマンな動機で始めた禁煙だった。その禁煙は現状を見る通り失敗したわけだが、その禁煙を妨害した人物がいた。他ならぬ、俺の親父だった。小学生の頃、親の目を盗んでキセルを吸い始めたという親父は、俺の禁煙を知った瞬間、あろうことかグーで殴りかかってきたのである。空手、ボクシング、その他諸々の格闘技を会得した親父の拳は相当効いた。

「禁煙するくらいなら、最初っから吸うんじゃねえ！」

そんなことを言っていたと思う。今思い返しても訳の分からん怒り方だった。親父の主張は、確かこうだった。

「煙草を止めるってことはな、愛した女を捨てるって行為に等しいんだよ。己の身体がぶっ壊れようとも、それでも付き合っていくのが本当の愛情だろ！ 止めるくらいなら最初から愛するんじゃねえ！ 煙草だってな、お前が愛してくれたから、今まで癒しと慰めを返してくれたんじゃないか！」

屁理屈もいいところだった。見事に崩壊した精神論である。

ただし、当時の俺はアレだったのでそんな親父の言葉に痛く胸を打たれてしまったのだ。親父カッケエ、マジハードボイルドだ、なんて思ってしまったのである。まだまだ俺も親父と同じようにアホだったのだ。

そんな親父は、もう三年も前に死んでしまった。

小雨が降りすさぶ中、横断歩道の前で信号が変わるのを待つ。確かあの日も、こんな天気だったな。

仕事終わり、帰宅後の一服はなし。そんな生活も今日で三日目。慣れたという感じはしない。むしろ未だに違和感がある。人の習慣というのは、一つでも失われるだけでも多大な不安に苛まれるものなのだ。

風呂上がりの妹は、「最近家の中の空気がいい」と上機嫌そうだ。俺も風呂に入り、気になる体重を計ってみた。そしたらびっくり、さっそく妹に体重のことを報告してみる。

「やべえぞ月子、この三日間で2kgも太った」

テレビを見ていた月子は思わず吹き出していた。それから自己主張の強い俺の腹をまじまじと眺め、そしてへそのあたりをペシペシと叩き出した。波打つ俺の脂肪の塊を見て、妹はまた笑いだす。

「兄ちゃん、豚じゃん！」

ひどく傷ついた。禁煙はいいとして、今度は肥満の件でアサミに

嫌われるかもしれない。ソファに腰を沈め、顔を落としてため息を一つ。

「あ、うそうそ。兄ちゃんかっこいいよ、イケメンだよ」

見え透いたお世辞ほど傷を深くするものはない。こんなビール腹を所有する男のどこがイケメンなんだよ、ちくしょう。禁煙に成功したら次は禁酒でもするか。

さて、禁煙日記も今回で4回目。なんとか三日坊主は免れたようだ。今日は二日目ほどの苦痛はなかったけど、それでもまだ危うい場面が何度かあった。この日という山場はなんとかクリアだが、まだまだ油断は厳禁だろう。明日も仕事なので、今日も早めに寝る。

禁煙4日目

9月5日 心は晴れやか、天気は知らん

禁煙4日目。

今日は、とうかさっきだが、とてもいいことがあった。ぶつちやけヒヤッホウという感じだ。漲るテンションが抑えられない。

とにかく、できるだけ落ち着いて日記を綴ろう。

今日の朝はいつもと何か違っていた。なんとなくだが、目覚めがいいのだ。本当に微妙な差だが、昨日、一昨日と比べるといくらか寝起きがいい。喉もそんなに渴いていないし、頭痛に至っては全くと言っていいほどだ。やっと体内の毒素がデトックスしてきたのかもしれない。

それでも寝起きの一服という習慣が失われたのは、何か心寂しいものがある。それでもこの辛さは二日目、三日目とは違うものだ。昨日までは肉体面、精神面の辛さだったが、今日は精神面だけのよくな気がする。

一番辛かった二日目を100パーセントとすると、三日目は80パーセント、一日目が70パーセント、今日は50パーセントという感じ。

朝食、妹の作ってくれた飯が美味い。味がクリアになったことも新発見で、食べても食べても飽きないし、朝だと言うのにご飯が何杯でも入りそうだ。これも体が健康になってきた証拠だろうか。

「兄ちゃん、いくらなんでも食べ過ぎだよ」

流石に妹に窘められた。しかしこの際肥満のことは目を瞑ってしまおう。今は禁煙が最優先だ。

仕事中、例の三澤主任にまた喫煙室に誘われた。本当に俺をどうしたいのだろう。

「いいっす。禁煙する気持ち揺らいじゃいそうだし」

今度こそきっぱり断ると、主任は残念そうに「なんだよ、まだ続いてたのかよ」とぼやき、一人でさっさと行ってしまった。禁煙前はよく主任と喫煙室で談笑していたので、これからはそれもなくなくなるのかと思うと、少しだけ寂しくもあった。きつと主任も同じ気持ちなんだと思う。

そうそう、最近俺の部署内では『千ヶ原は禁煙中』という事実が完全に定着しつつある。うちの部署は喫煙者が多いので、今日は色んな人に『禁煙の秘訣』とやらを聞かれた。そんなもん俺が聞きたいくらいだ。どんな方法を試してみても、やはり禁煙というものは辛いのだから。

禁煙したい人間は、やはり女子社員が多いということが分かった。女性の喫煙者にとつて、煙草は美容の大きな妨げになるという自覚があるらしい。そういえば、禁煙の本には『男性より女性の方が煙草への免疫力が低い』と書かれていた。癌の発症率も女性の方が煙草の方が高いらしい。妊婦の喫煙も絶対厳禁だしな。美容のみならず、女性の方が様々な面でデメリットが多そうだ。女子社員には『禁煙すると太る』という俺自らの検証結果だけは避けてアドバイスしておいた。煙草を止めてからどことなくいい人になった気がする。何だか新研ゼミみたいな雪だるま式の宣伝文句みたいになってきた。

あと一つ、女子社員に囲まれる俺が羨ましいのか知らないが、嫉妬深そうな目で小林がこちらをちら見してきていた。

仕事中も辛いと感じることはあまり無くなっていた。今日、本当に危なかったのは、帰宅してからだった。

帰ってすぐに妹が用意してくれた夕食を食べたのだが、部屋に戻ってあることに気づいた。明日の予定を確認しようと、ビジネスバッグを探ったときだった。

「はあ？」

思わず驚きの声が出た。

何故か、未開封のマルボロの箱が出てきたのである。これにはかなり動揺した。こんなもの、買った覚えなどあるはずがないのだ。ましてや今日はコンビニにも寄らず真っ先に帰宅したし、俺が夢遊病でもなければこんなことはあり得ない。

マルボロを机の上に置き、ベッドの上でそれを眺めながら考える。この事象について、考えられる可能性が一つ。

それは、『誰かが俺の禁煙を止めたために仕組んだ』ということだった。それなら大体の検討はつく。あいつだ、小林に違いない。やつには前科がある。二日前、俺の背広にキャスターを仕込んだのもあいつだ。昨日の朝一番に拳骨をかましたのに、まだ懲りてないというのだろうか。そもそも、何故小林が俺の禁煙を止めなければならぬのか。

「まさか」

また独り言。ハードボイルドの次は名探偵か俺？ まあいいや。

そうだ、小林にはホモ疑惑があるのだ。そういえば小林の入社当時、あいつに仕事を教えていた時期があったが、どうもその頃からやけに俺に懐いてきやがる。可愛い後輩だな程度にしか思っていなかったが、思い返せば色々といつには怪しい点があった。つまりあいつは、俺が禁煙することで、さらに俺が自分から離れてしまうのではと考えた。だからこういう真似をしたのだ。今日俺が女子社員に囲まれていたとき、やたらとこっちを見てきたのには、そういう理由があったのだ。

いかん、鳥肌が立ってきた。もしかしたらあいつは俺が思っている以上に危ない男なのかもしれない。

「兄ちゃん、お風呂沸いたよー」

部屋の外から妹の声がする。俺は一端考えるのを止め、寝間着を持って部屋を出た。

風呂上がり、妹におやすみを言って部屋に入る。

小林の件についてあれこれ考えるのはもう止めた。俺に今求めら

れているのは、この机の上に置かれたマルボロをどうするかだ。

もちろん、吸いたい気持ちが全くないと言うわけではない。昨日までに比べると気持ちは大分治まっている。問題はそこじゃない。もっと根本的なものだ。

よっこいしょ、とベッドの上に寝転び、横目に視線を送った。俺の視線の先には、マルボロのグリーンのパッケージがある。

こんなことを考えるのは、今まで応援してくれた妹に失礼かもしれない。でも、ここのところなんとなく思い始めるのだ。

——この禁煙、ほんとに意味あんのか？

禁煙を始めたことがスタートであれば、ゴールがなければやる気が起きない。

健康の面では意味があるだろう。俺の精神的な面を鍛える意味でも充分だ。

それ以上に、もしこの禁煙に成功したとして、果たしてもう一度アサミとやり直すことができるのか？

俺にとっての一番の目標、ゴールはそこであって、健康云々ははつきり言ってオプションでしかない。アサミがいくら猫被りだからといっても、根が悪いやつではないことは俺にだって分かる。俺の健康を気遣ってそれとなく禁煙を進めてくれた。多分、この前のファミレスでキレたことだって、俺にどうしても禁煙させたかったからじゃないのか。そう思いたい。

でも、まさかあれで愛想をつかされていたら？

いくら禁煙したと言っても、もう俺への興味を失ってしまったら？

その可能性は充分あり得る。アサミはかなりの美人で気が利くし、普通なら男が放っておかないだろう。もしかしたら、もう次の男をこさえてるのかも。そのときはどうすればいい？　もしそうだとしたら禁煙してた俺が馬鹿みたいだ。

そう考えるとモヤモヤしてきた。いてもたってもいられなくて、俺は携帯を開いて電話帳を検索した。

アサミの電話番号とアドレスが表示される。即座に電話番号を選択する。ここで俺は操作する指を止めた。

ここで電話して一体何を話すんだ。禁煙したからもう一度付き合ってください、か？　そもそも着信拒否にされてたらどうする？

俺、もう二度と立ち上がれないかも。ここはメールだ、どんな返事が返ってきてても着信拒否されてても、電話するよりはダメーじが少ないはずだ。いやまて、こんな大事な話を普通メールですか？

俺は悩んだ。恐らく三十分は携帯を睨んでうんうん唸っていただろう。

結局メールをすることにした。俺はやはり度胸がないらしい。内容はかなり簡素なものだった。あまり自分の文を見返すのも恥ずかしいので、一気に送信ボタンを押した。

送信が完了したことを確認して、息を落ち着かせてから自分の文面を見直す。

『今、禁煙4日目。どうですか』

どうですかじゃねーよ。

心の中で絶叫。妹が起きてしまったては悪いので。

どうしよう、マジで意図の分からんメールを送ってしまった。結局何が言いたいんだよ。これ、送られた方が困るだろ。『だから何？』って返ってくるのがオチだ。

頭を抱えて自己嫌悪に陥っていると、やがて携帯が鳴り出した。

これは心臓が止まるかと思った。着信音が、アサミで設定していたものだったからだ。まさか返ってくるとは。

俺は恐る恐る薄目を開けてそのメールを確認する。

『やるじゃん』

短い。短すぎてどういう風に『やるじゃん』なのか分からない。目を輝かせて感激したように『やるじゃん』なのか、鼻くそほじりながらどーでもよさそうに『やるじゃん』なのか。

確認する必要がある。俺は慎重に操作し、文字を打っていく。ここは直球で聞こう。ここにきてあやふやな返事をして仕方がない。

『成功したら、俺とやり直してほしい』

すっかり汗ばんでしまった指で、送信ボタン。

ふう、と息をつく。これであとはアサミの返信を待つのみだ。なんだかんだで今日まで全ての誘惑に耐えてきた。全てアサミのためだ。これで断られれば、俺はまた目の前にあるマルボロに手を出すだろう。そのときは、妹に毎日土下座して生活しなければならぬ。妹は許してくれるだろうか、駄目だろうな。

でも止められない。俺の中にはまだ煙草の魅力が残留している。

フラれたら、またニコチンの海に溺れてしまう。

着信音が鳴り響く。俺は机からマルボロを取り、片手に携帯をぐっと握りしめた。フラれたら吸う、オーケーだったら捨てる。

今一度深呼吸を敢行。目を見開き、見間違いないように食い入るように携帯の画面を凝視する。

さあ、どうだ。

『一ヶ月禁煙できたらね』

ゴミ箱へ向けてマルボロをダンクシュート。

今日はこんな具合だった。正直まだ興奮している。やる気も絶好調というものだ。一ヶ月？ 余裕過ぎて笑えてくるぜ。

おっと、もう1時か、早く寝よう。

禁煙5〜7日目

9月6日 暑い、晴れすぎ

まだ寝起きがいいとは言えないが、大分楽になってきた。禁煙中は寝起きが勝負どころのようなものだったが最近はそのままで我慢しているという感じはしない。フリスクを幾つかかじればいける。

今日は仕事が特に忙しくて禁煙のことを考える暇すらなかった。

同期の田村京子が俺に影響を受けて禁煙を始めたという。休憩中、デスクの上で頭を抱えてぶつぶつと何か呪文のようなものを唱えていた。煙草のことを必死に頭から取り払おうとしているらしい。この前までの俺を見ているようで面白かった。それでも禁煙中の身にとっては本当に死に物狂いなのだが、端から見るとおちよくりたくなってくる雰囲気だ。少しだけ主任の気持ちが分かった。

今だに禁煙に慣れない部分がある。喫煙していた頃、仕事が一段落したときなど、5分間の軽い休憩として喫煙室に入っていたが、禁煙するとこの軽い休憩に何をしていたのか毎回迷ってしまう。その都度トイレにいくわけにもいかないし、その休憩の度にコーヒーを飲むのも飽きてくる。間が持たないのだ。仕方なく今日は携帯でポチポチとゲームをしていた。なんとなく居心地が悪い。

逆に言えば、この喫煙に使っていた5分間も結構無駄だったように思う。

例えば旅行に行く場合。飛行機で移動するとして、搭乗前に喫煙所を探してあちこち歩き回ったりする。空港は広いので、中々時間を食うものだ。その時間に旅行先での計画を見返したり、搭乗便の確認をしたり、トイレに行ったりと、そういうことに時間を使うのが有意義だ。搭乗後も、旅行先でまず喫煙所を探さなくてはならない。一緒に旅行に来た人にも迷惑がかかるかもしれない。そのせい

で予定のバスや電車なんか遅れたら、もう旅行中は頭が上がりないだろう。

禁煙中に感じたのが、普段の生活の中で、そういう余計な時間を使う必要がなくなったというころだ。色んな要素を総合しても禁煙にはメリットが多いということが分かる。

三澤主任に「まだ禁煙してるのか」と聞かれた。そう毎日毎日聞かれても困るが、やっぱり気になるらしい。彼は、俺に禁煙など無理だと言い切った手前もあるのだ。

さらに明日は週末ということで、飲みのお誘いをされた。飲み会が禁煙者にとって一番危険な行為だというのは以前経験した通りなのでできれば避けたかったが、主任に誘われて断れるほどの度胸は俺にはなかった。

家に帰ると妹が夕食の準備をしていた。俺が最近太りだしたのを考慮しているらしく、メニューもヘルシーなものばかりだった。物足りなかったけど、二度と妹に豚呼ばわりされたくない所以我慢することにした。太った状態でアサミと再会するのも嫌だった。

やはり今日はこれといって特筆することもない。寝る。

9月7日 雨だった、最近天気が不安定だ

目に見えて朝の目覚めがよくなっている。そろそろ禁煙の苦痛というものを感じなくなってきた。

それでもテレビや本などで喫煙の描写があると、「煙草ってこんな感じだったなあ、いいなあ」とつられてしまいそうになるので油断はできない。

朝からサラダが大量に出てくる。妹が他のおかずを一切作ってくれなかったのだ。仕方ないのでマヨネーズをかけて食べようとする

と、妹が「マヨは太るからダメ。兄ちゃんはドレッシングね」とマヨネーズを取り上げられた。ダイエットもそこまで徹底することないのに。

同期の田村京子が、早くも禁煙失敗してしまったようだ。「どうしたら止められるの」と相談される。俺は、「気合いだ気合い」と返しておいた。田村は何だか釈然としないようで、肩を落として自分のデスクに戻っていった。

仕事の後、三澤主任の予告通り飲み会が行われた。

メンバーは主任、俺、小林、田村などの8名。喫煙率が半数以上ということだろうざりした。新宿のもつ鍋屋に入り、生ビールで乾杯。

喫煙グループは乾杯した後すぐに各々煙草を吸い出した。禁煙してから鼻が良くなったせい、匂いかなり気になった。せつかくのもつ鍋が台無しになった気分だ。吸ってるうちって、こういうことは気づかないもんだよな。

小林と隣の席だったので、一昨日俺のビジネスバッグに入っていたマルボロの件について問い詰めてみた。本当は昨日のうちに聞いておきたかったが、忙しくてこいつと話す暇がなかったのだ。

「この前俺のバッグにマルボロ入れたのお前か？ マジでそういうイタズラ洒落にならんからな」

「えー？」

小林は覚えがないという顔をした。とぼけてやがる、憎たらしい野郎だ。問答無用でヘッドロックでお仕置きしておいた。みんな酒が回っていたのでかなり盛り上がった。小林は「違うっすよまじでえ！」と悲鳴を上げている。

段々酒が回って気分がよくなる。視界もとろんとしてきた。煙草を吸う奴らが魅惑的に映る。酒が入ると判断力が著しく鈍るのだ。禁煙について回りからいじられ、ふざけた先輩から煙草を差し出される。

一本くらい吸ってもいいよな、という安易な思考に一瞬とらわれていた俺がいて、我に返って冷や汗をかいた。ギリギリでその煙草を拒否した。

やはり飲み会の空気というのは独特なもので、普段どんなに気を強く持っていても流されるときは流されてしまうものなのだ。俺はなるだけ煙草のことを考えないように、トークだけに集中することにした。

飲み会は10時頃に終わった。二次会のカラオケにも行きたかったが、流石に今日はこれ以上耐えられないと思い、涙を吞んで辞退した。カラオケというのは何と言っても他人が歌っているときの間が持たない。うっかり煙草に手がいつてしまいそうだ。

フラフラのベロベロになって帰ると、妹に叱られた。

「飲んで遅くなるならメールしてよ、ご飯作っちゃったじゃん」

すっかりメールし忘れていた。でも何故かまた腹が減ってきたのでご飯は食べた。いくらヘルシーとは言えこれでは太る元だ。風呂から上がって体重を計ると、また増えていた。禁煙前と比べると3kg増。

また妹に笑われた。悔しい。

そうそう、そういえばまた俺のバッグにマルボロが入っていた。これにはほとほと呆れてしまう。もちろんすぐに捨てたが、小林のやつ、反省というものを知らないらしい。

9月8日 それなりに晴天

土曜日。とうとう禁煙も七日目を迎えた。本当にここまで続くとは。感慨深いものがあるな。

まだ寝ていたかったのに、6時半に妹に叩き起こされた。昨日か

なり飲んだのに、勘弁してほしい。眠気眼でジャージに着替え、この前の日曜と同じように走って公園に出かけた。走っている途中、胃の中の物が何度も逆流しそうになった。

この前と同じように、妹から空手の型を教わった。妹も「教えると練習になるし、兄ちゃんも痩せられるでしょ」と幾分楽しそうにしていた。こっちは二日酔いが抜けないし、顔も青くなっている一方だ。

帰ってきたときにはもうクタクタだった。風呂に入り、飯を食べ、またベッドに入った。妹に「食べたあとすぐに寝ると牛になるんだよ」と訳の分からないことを言われたが、それでも寝た。朝からやけに疲れた。

そうだ、そのとき夢を見たんだ。昔の夢だ。

一面真っ白で清潔感のある病院の一室。俺は妹とそこへ訪れていた。ベッドの上には親父がいた。呼吸器をつけ、いつもの不敵な表情も、暑苦しい笑みもなく、普段では想像もつかないほどやつれていた。死にそうな面だった。

妹は林檎をうさぎ型にするのに苦戦しながら、横たわって上を向いたままの親父に何事か話しかけていた。親父は何も言わなかった。虚ろな目を天井に向けたまま、荒い息を呼吸器の中で吐いていた。暇だったので俺はずっと漫画を読んでいた。読み終えた頃には何もやることがなくて、それで外へ煙草を吸いにいこうとしたんだ。それで、親父がようやく口を開いた。俺は足を止め、親父の方を振り返った。

ゾンビのうめき声のようだった。親父は手を震わせながら、俺の方へと精一杯伸ばしていた。俺を呼んでいたようだった。妹が手を止め、親父に詰め寄る。俺も親父の口元に耳を寄せた。

「孝明い」

爺さんのおぼつかない声で親父は俺の名を呼んだ。何だよ、と返すと、親父は懇願するように息を荒げた。

「お前、煙草持ってんだろ。一本、よこせ」

ゾツとした。

お前馬鹿かよ、そんな言葉が思わず口をついて出た。死にそんな顔して、そんな体になって、ようやく出た言葉がそれかよ！

こうはなりたくないと思った。俺はこんなアホな喫煙家にはなるものかと。思えば、あのときにも煙草を止めていればよかったんだ。それでも俺は、親父のそんな姿を見ても煙草を止めなかった。親父のような最後にならなければいいやって、そんな程度の心持ちでしかなかったんだ。

こんなこと、こうして夢でも見なければ思い出すこともなかった。俺はずっと目を瞑り、その光景を思い返すことを避けていた。なんて恐ろしいことだろう。俺もこのまま吸い続けていたら、あんな最後を迎えていたのかもしれない。

起きたとき、俺のテンションはただ下がっていた。嫌なこと思い出してしまった。嫌な思い出だっただけに、俺は親父のあの姿を忘れてはいけないんだと思う。禁煙に失敗すればあんな風になるぞと自分に言い聞かせなくてはならない。

妹はいなかった。携帯を見ると、『ミキちゃんと遊んでくるね』というメールが入っていた。

それから俺は一人、色んなことをぼーっと考えていた。親父が死んだ後、当時中学生の妹には相当なショックだったようで、数ヶ月は呆然としていて元気がなかった。あの頃に比べると今は毎日が楽しそうだ。俺が煙草を止めたこともかなり嬉しかったんだろう。だからあんなに俺の禁煙を応援してくれているんだ。

俺もいつか親父のようになるのではないかと、妹も危惧していたはずだ。だって、禁煙するまで俺は、まさに親父の生き写しのような喫煙馬鹿だったのだから。親父が死んでから家計が苦しくなったのも事実だ。家のローンだってまだ残ってるし。妹にも無理をさせていたと思う。俺の煙草代だってバカにはできなかったのだ。

煙草代が浮いた分、妹には前から欲しがってたWiiでもプレゼントしてやるか。今だにあいつスーファミのマリカーで遊んでもんな。そんなことを密かに計画する俺だった。

さて、現在深夜の23時。明日も早朝から妹に叩き起こされるだろうから、今日はもう寝る。

禁煙8日目〜22日目

9月9日 曇り、少し肌寒かった

朝6時、予想通り妹に起こされた。昨日早めに寝ていてよかった。それにしても妹のエネルギーには計り知れないものがある。このところ毎日食事の用意をしてくれるし、その他の家事も全て妹がうけおっている。手伝おうとしても、「兄ちゃんは禁煙に集中してよ」と言っていて聞かない。

本当のことを言うと、最近禁煙に努力をしているという気がしなくなってきた。もう煙草を吸わない生活が当たり前になっている。煙草について考える時間も日に日に少なくなっていくのだ。といっても、たまに「煙草ってどんな味だっけ?」と思い出すことがあるが、それでも吸いたいと思う気持ちはほとんどない。

今日もジャージに着替えて妹と公園へ赴く。そういえば、このところ体の調子がすこぶる良好だ。肌もかさつかないし、髪の手やもどことなくいい気がする。体も軽い、肩凝りもなくなってきた。これも煙草を止めたお陰だろうか。いいことづくめじゃないか。

いつものように公園で妹と空手をする。結果だけ言うと、この空手のせいで少しだけ警察のお世話になった。

順を追って書いていこう。

いつものように妹から空手の型を教わっていると、突然妹がこんなことを言い出したのだ。

「ちょっと組み手やろうよ」

空手の型を数日教わっただけの俺にこんなことを言う妹がどうかしていた。多分型を教えるのに飽きてきていたのか、誰か殴ってスッキリしたかったんだと思う。

妹が、こう突くからこう捌いて、こう蹴るからこういなして、と

言うので、俺は終始言いなりになるだけだった。もちろん俺が妹の技をうまく捌けるわけもなく、腹や足になんども空手技を食らい、20代後半にもなって涙目になってしまったのだ。

止めたいと言っても聞かない。段々兄をぶっ飛ばすのが楽しくなってきたんじゃないかと疑った。いつも優しかった妹の目は、どうしてかこのときだけギラギラと輝いていたのだ。いかん、脳裏で親父の顔とシンクロしてきた。

すると数人のお巡りさんが声を上げながら乱入し、ボコボコにされる俺を保護してくれたのである。公園で男と女が殴り合いの喧嘩をしていると通報を受けたらしい。通報を受けたとき、当然お巡りさんは男が暴力を振るっているのだと思ったようだが、実際暴力を振るっていたのは妹の方であり、兄はただただ殴られるだけだったのである。なんとも情けない話だ。

その後必死で弁明し、お巡りさんには帰っていただいた。妹も我に返ったらしく、半狂乱になりながら謝ってきた。俺は曖昧な渴求た笑いを浮かべるだけだった。

「兄ちゃんごめん、あたしのことも殴っていいから、ほら殴って！」
こんなことまで言い出す始末だ。嫌だと言っても聞かないのでデコピンをすると、妹は『まだ足りない』と騒いだ。妹があまりに反省をやめない上、そろそろ泣き出しそうになっていたので、ファミレスに連れて行ってハンバーグセットを食べさせて落ち着かせた。

午前はそんな感じ。夜まで妹の謝罪の言葉を聞く羽目になった。俺の休日は疲れることだらけだ。寝る。

9月10日 気持ちのいい晴天

禁煙9日目。いよいよ書くことが無くなってきた。禁煙の辛さというものがほとんどないのである。あとはこの生活をあと20日続

けるだけのようだ。

たまにアサミからメールが来る。俺の禁煙がちゃんと続いているか聞いてくるのだ。自信を持って『問題なく続いている』と返す。早く達成してアサミに会いたい。

9月15日 晴れ

日記の存在を忘れていた。数えてみるともう禁煙を始めて二週間が経っている。禁煙しているという自覚すら無くなってきた。

今日日記の存在を思い出したのも理由がある。バッグの中にマルボロが入っていたのだ。小林が怪しいと、いつもなら思うだろう。しかしあいつの様子を見ると、どうも違う気がする。

とすると、この煙草は一体誰の仕業なんだ？

段々気味が悪くなってきた。

9月19日 雨、台風が来るかもしれない

びっくりするぐらい飯が上手い。味が濃厚で、風味も禁煙前とは段違いだ。箸が進む。毎食、ご飯おかわりがデフォルトとなってきた。

風呂上がり、自分の腹を鏡で見てもかなり落ち込んだ。顔とか腕とか足とかは痩せてるのに、なんというアンバランス。腹の中に別の生き物でも入ってるんじゃないだろうか。

「兄ちゃんってもしかして……」

妹が意味深に俺の腹をのぞき込んでくる。

「煙草やめたのって、赤ちゃんできたから？」

これは流石にブチツときた。「妊娠6ヶ月なめんじゃねえ!」と叫びながら追いかけると、妹はヘケヘケと笑いながら逃げていった。あとで酷い鬱状態に陥った。いずれダイエツト日記をつけなければいけないかもしれない。

9月23日 台風一過、文句なしの晴天

身体が求めているわけではない。決してそういうわけではないんだ。しかし、ああ、懐かしくて恋しくて敵わない。

以前書いた通り、やはり煙草は恋人だった。男は恋愛を上書き保てできない生き物なのだ。そもそも、あまりにも思い出が深すぎたんだ。三週間やそこら吸わなかっただけですっぱり忘れられるものではないのかもしれない。禁煙22日目にして、まだこんな気持ちが残っていたとは。

はあ、憂鬱だ。なくしてから始めて気付くってよく聞くけど、俺の場合それが煙草だなんて。ロマンの欠片もねえよ。いい加減、終止符打とうぜ俺。アサミまでもう一歩だぞ。

田村の禁煙が順調らしい。今日で4日目だとか言ってたか。どうでもいい。

ああ、恋しい。煙草、タバコ、たばこ。

禁煙23日〜34日目

9月24日 ほどよく晴れ

今日は休暇をとった。それというのも、今日は親父の命日だからだ。俺は妹を連れて親父の墓へと訪れた。

親父の墓石を雑巾で磨いていると、妹が手をすり合わせてぶつぶつと何か呟いていた。

「今度の試合で勝てるよう見守っててください、師匠……」

「今ぐらい親父って呼んでやれよ月子。ていうかお前も掃除手伝ってくれ」

「はあい」

墓石の周りは結構汚れていた。生前の親父の部屋のような。妹と掃除していると、余計にそう錯覚してしまう。身の回りの世話はできる限り周りに任せようとする横着な親父だったが、まさかそれを俺たち子供にそれを押しつけるなんて。どんな思い出をほじくり返しても最低な親父だった。

掃除を終えて、俺はあらかじめ買っておいたハイライトを墓前に供える。親父のよく吸っていた銘柄だ。これが親父の肺を蝕み、死に至らせた。生まれてから一度も医者のお世話になったことがないと豪語していた親父だが、結局彼も煙草の害だけには負けてしまったようだ。

実は親父が病院に運ばれた経緯は、そういう病気からじゃなかったことを思い出した。

交通事故だ。

ある日、親父から「たまには親子仲良く飲みにも行くか」と誘われたのだ。自宅から近くの居酒屋に二人で入り、久しぶりに親父と酒を交えて人生はどうだこーだ取り留めもなく語りあったのである。親父はこのとき、ほろ酔い気味にお袋のことを話してくれた。

「母ちゃんが孝明を身ごもったときに、お腹の子の身体に障るから煙草やめろって言われたっけなあ」

そんな風に言っていたと思う。親父が初めて煙草を控えた瞬間である。その後親父は惰性的に禁煙を続けたそうだ。月子が生まれ、それからお袋が若くして亡くなった。それから親父はまた吸い始めたから、期間にして十年ほどだろうか。

「母ちゃんが逝っちまって、俺あまた吸い始めた。煙草は、母ちゃんの代わりだったんだと思うんだ」

俺にとっての煙草が『癒し』だとしたら、親父にとっての煙草は『支え』であっただと思う。禁煙した今になって考えると、どちらもし時的なもので結局は自分を破壊するものだと言えない。

まあ、俺の妄想なんだけど。親父が煙草一つにそんな思いを乗せるような繊細な人間だったのかは定かではない。

居酒屋の外に出て、俺は親父のシャツの上からでもわかる筋肉質な背中を見つめながら歩いた。からりと乾燥した夜だった。親父は不寐にも、車道脇を歩きながらハイライトをくわえ、火をつけ始めた。空気は乾燥しているくせに、風が強いせいか火をつけるのに苦戦しているようだった。

「ちゃんと前見て歩けよ、親父」

「おう。おっ、点いた点いた」

暗闇に向かって煙を吐く親父。ふと、小さな突風が俺たちを横殴りに叩いた。親父の口元から吸い出したばかりのハイライトがこぼれ落ちる。風に転がされ、ハイライトは煙を噴出しながらころころと車道の方へと転がっていく。

「へっへ、もったいないもったいない」

転がっていくハイライトを、親父は身を屈めて小走りに追っている。やっと拾い上げたとき、親父は車道の真ん中に居たのだ。今思えば深刻過ぎるほどフラグが立っていた。

「煙草一本で卑しいなあ親父は」

親父はフィルターについた砂をはたいて口にくわえ、にかつと笑

う。

「不思議だよなあ孝明。煙草は百害あって一利なしなのに、どうして人はそれでも吸い続けるのかなあ？ 何か少しでも利があんじゃねえのかなあ？」

唐突に何の話だよ、と俺は苦笑した。

「知るか。ていうか危ねーからいい加減こっち戻ってこいよ」

「何故かってよく考えてみた結果なんだけどさあ！」

親父は声を張り上げた。住宅街の通りだったから、俺は少し慌てた。酒が回っているらしい。

「利なんかねえんだよ、やっぱ。喫煙者ってのは、詰まるところ浸ってんだよ。煙草に何か希望めいたものを求めている！ 馬鹿みてえじゃねえか！ 結局無くしたもののぼっかなのに！」

「親父、まじうるさいって。つーか戻ってこい。お口チャックで速やかにこっちに帰ってこい」

俺がああとき、もっとやる気出して親父を連れ戻していればな、と今になって思う。

「やっぱり煙草は百害あって一利なしだ！ でも！ たまにそういう理屈に抗ってこそその人生だろうが！」

何が言いたいのか全く分からなかったが、親父はそれでも底抜けに明るい笑顔をしていた。

「俺はもう二度と煙草をやめな」

親父はその笑顔のまま、50ccのおばちゃんオートバイに吹き飛ばされた。

右上腕骨折で全治一ヶ月。無駄に身体を鍛えていたお陰だ。親父、間抜け過ぎるぜ。問題はその外傷的なものではなく、芋ずる式に発見された肺癌だった。50ccにぶちかまされたのが幸だったのか不幸だったのか。少しでも延命できたことを考えれば、あの事故は結果的に考えて良かったのかもしれない。

帰りの電車の中、座席に座りよだれを垂らしてうたた寝を打つ妹

の間抜け顔を見ながら、俺は親父のことを思い出していた。

人はたまに理屈に合わないことをするって誰かが言ってた気がするけど、あまりにそれが過ぎると親父のように痛い目を見るのかもしれない。親父の人生は果たしてあれでよかったのだろうか。よく分からないけど、故人の人生の善し悪しをどうだこうだと判断するのも失礼か。俺は目を閉じ、思考を断った。

9月25日 曇り

給料日だ。妹のためにWiiとスマブラを購入し、アサミへのプレゼント（謝罪品？）を買って帰宅した。

Wiiを見せると、妹はスーファミのコントローラーを投げて飛び跳ねながらWiiに抱きついた。

「ちよっと、Wiiとか！ しかもスマブラって兄ちゃん！ 奮発しすぎだってば！」

あり得ない喜びよう。貧乏症がすっかり染み着いてしまっているようで、兄として少し切なかった。画面上で妹のように飛び跳ねていたレトロなドットマリオが、クッパのファイヤーに直撃していた。「協力してくれた感謝の気持ちで、いっぱい遊べよ。その代わり勉強も頑張るように」

妹は目をきらきらとさせて頷いた。まるで新しい玩具を与えられた子供のように微笑ましい。あ、そのまんまか。

それから深夜まで妹のスマブラに付き合わされた。日記を書いている現時刻は深夜の2時。妹は遊び疲れてソファで眠ってしまったのでベッドへ運び出すのにかなり苦戦した。まあ、可愛い妹だ。

9月28日 洪水警報が出るほどの大雨

煙草差し入れ事件の犯人が今日、ようやく発覚した。なのに達成感も安心感も全くない。下らなさすぎて呆れてしまった。世の中にはこんなことに精を出す奇妙な人種がいるんだなあ。

残業で遅くまで会社に残っていたときのことだ。俺の他に残っているのは主任、小林、田村のいつものメンバーだ。

田村涼子が俺のデスクまでやってくる。

「千ヶ原くん、最近お肌の調子良さそうだね」

「そうか？」俺は自分の頬をさすってはにかんだ。

「絶対そうだよ。やっぱさ、これって禁煙のお陰じゃない？」

最近、どうやら彼女から同志だと思われているらしい。禁煙仲間というやつだろうか。田村は禁煙パイポをくわえて、にへへとにやけた。

「なんか顔立ちも垢抜けた感じするし、彼女さんともきつとうまくいくわよ」

「いやあ、どうだろうな」

思わず照れ笑い。俺たちの会話を察知したのか、小林がデスクチエアを転がして俺たちへ近寄る。

「せんばあい、俺も煙草止めたら彼女できるんすかねえ？」

「小林くんは煙草の前にそのオカマっぽさをどうにかしないとねえ」

「えーっ、ひどいよ田村先輩！俺ってやっぱカマっぽく見えますう？」

田村と小林が騒ぎだし、主任が眉をひそめた。咳払いをして二人に注意を促そうとするが、全く気づいてくれない。小林は惚けた面を上げて主任を見やる。

「主任、一緒に禁煙してくださいよお。俺、このままじゃ悔しいですう」

イライラしたように主任がキーボードを叩く手を止める。

「うるさい、やるならお前一人でやれ」

「えっ、でも主任、この前煙草やめるってー」

「小林い！　いつまでも駄弁ってないで仕事しろ！　お前が一番プログラム抱えてんだからな！」

「ひっ」

主任が手のひらでデスクを叩く音に小林はすくみ上がった。そそくさと自分のPCの前に戻りこれ見よがしにキーボードを連打し始める。田村も慌ててPCに目を戻した。

主任は顔を真っ赤にしたまま席を立ち、喫煙室の方へと向かっていく。扉の前で足を止め、横目に俺を手招きしてくる。

「千ヶ原、ちょっと」

「はい？」

「いいから、来い」

心配そうに俺を見上げてくる田村と小林をちらりと見て、俺は黙って主任についていった。喫煙室で主任と二人きりになり、何の話を持ち出されるのかと待っていたが、主任は煙草をくわえたまま虚空を見つめるばかりだった。時折頭を掻いたり、ジッポの蓋を閉じたり開いたりするばかりだ。埒が明かない。

「あの、何でしょうか」

主任は驚いたように俺を見て、照れ笑いを浮かべて後ろ髪を掻いた。

「その、そろそろ謝ろうと思ってな」

「……謝る？」

とぼけてそう返したが、実はもう大体の検討はついていた。俺が小林や田村と禁煙を話題にするとき、主任は何か恨めしいものでも見るかのような目を向けていた。初めは仕事中の私語を責めているのかと思ったが、なんとなく違う可能性にも気づいていたのだ。

「とぼけんでくれ千ヶ原。自分でも、本当に下らんことをしたと思ってる。許してほしい」

俺は呆れかえっていた。あんないたずらをしたこともそうだし、こんなことでわざわざ部下に頭を下げることに自体が下らなかった。

許しを乞う飼いだのような目で、主任は俺の顔を覗き込んでくる。

「もう怒ってないし、そもそもあんなの、俺はなんとも思っていないですよ」俺は主任に聞こえないように小さくはめ息を吐いた。「それより、どうしてあんなことをしたんですか？」

それが一番の疑問であった。主任ともあろう人が何故あんな幼稚ないたずらをしたのか理解できない。

「妙にイライラしてしまったんだ。実は俺も禁煙を何度も試みていてな、妻や子供には疎まれるし、どこへ行っても肩身が狭いし、いつそ止めてしまおうと。だが、それでも今だに止めていない。止められなかったんだ」

「それで、腹いせに禁煙する俺を妨害しようとしたんですか？」

「……」

かける言葉も見つからない。動機まで子供じみている。上司としての威厳も丸つぶれになっていた。主任はひたすら顔を下げている、喫煙室に微妙な空気が流れる。

「も、もういいですよ。さっき言った通り怒ってないし、誰にも言いません。忘れましょう」

「本当か？」

主任ははっと顔を上げる。俺は無理矢理微笑んで頷くと、主任も快活に笑った。

「いやー、すまんかったな千ヶ原。はっはっはっ、どうかしてたよ俺！」

背中をいきなりどんと叩かれてむせる。いつもの主任の傲慢な声色に戻り、俺はひとまず安堵した。彼にこんな子供のような一面があったとは驚きだし、それに転じてこの変わり身ようだ。色んなものを総合して、やはり主任らしいといえば主任らしい。

本気で大丈夫か、俺の会社。切実に勤め先の未来を心配する俺だった。

10月5日 晴れ

もう禁煙日記は今日で最後になると思う。というか、今日で最後にしなければいけない、というのが正解か。

禁煙を始めて、いつの間にか一ヶ月が過ぎていた。朝、家中の『絶対禁煙』の貼り紙を妹と一緒に剥がして回る。特に感動はない。こここのところ、頑張ったぞという感じはしないのだから。ただ、達成感だけは全身に満ちている。いよいよ、今日は俺にとっての再出発となる日なのだから。妹から度々期待に満ちた目を向けられ、知らないふりをして目を逸らす。結局、最後まで妹が禁煙のきっかけを聞いてくることはなかった。言わなくても絶対こいつ感づいてるからなあ。

そうそう、三日ぐらい前からだろうか。主任が禁煙を始めていた。小林だけ喫煙組に残されて寂しかったのか、主任に「止めないって言ったのに、なんで止めちゃうんですかあ」とすがりついてはウザがられていた。主任と目が合い、何か意味ありげな笑みを向けられた。

久しぶりにデート専用の服をクローゼットから出し、着替えて鏡の前に立ってみる。うん、決まってるぞ俺。それに、あの憎たらしいビール腹は最近大分おとなしくなってきた。実は、今は禁煙というよりダイエット方面に力を入れている。今回も妹が全面協力してくれている。給料入ったら、またゲームでも買ってやるか。

「兄ちゃん、今日はどこでデート？」

鏡の前で髪をセットする俺の後ろから、妹が尋ねてくる。知っていたのは案の定のこと、露骨な質問をしてきやがる。

「まずはファミレスだな」

「へー」

それだけ言って、妹はスマホのゲーム画面に顔を向けた。ゼル

ダの動きに磨きがかかっている。妹の横顔は、どこか嬉しそうにやけていた。

よし、と自らの頬を叩く。うん、やはり田村の言う通り肌の調子がいい。

腰を上げて玄関へ向かうと、妹の元気な声がかかった。

「兄ちゃん！」

「んー？」

「道に落ちてる煙草、吸っちゃ駄目だぞー！」

思わず吹き出す。全く、このタイミングで懐かしいこと思い出させるなよ。

「バカ、親父と一緒にすんな」

妹と親父を引き合いにした冗談を交わせる日がくるとは、と今更ながらに思う。妹も強くなったものだ。

玄関を開け、晴れきった空をしばし見上げ、深呼吸。ああ、空気が美味しい。ポケットの携帯が震える。お、もう来たか。

『もう着いたよ』

携帯越しに彼女の声が聞こえる。久しぶりのアサミの声は、昔の甘ったるい猫撫で声に戻っていた。

「随分早いな。すぐ行くから待っててくれ」

『うん。待ってるからね、禁煙席で』

「ああ、禁煙席でな」

携帯を閉じ、もう一度空気を味わってから俺は歩き出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0197o/>

禁煙日記

2011年5月5日05時10分発行